HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中学生期における「暗示」の教育的効果［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	内田, 昭利
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	乙第7007号
Issue Date	2017-03-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65385
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Akitoshi_Uchida_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称　博士（文学）　氏　名　内田　昭利

審査担当者
主査　教　授　仲　真紀子
副査　教　授　田山　忠行
副査　准教授　竹澤　正哲
副査　教　授　守　一雄（東京農工大学大学院工学研究院）

学位論文題名

中学生期における「暗示」の教育的効果

本論文は，現職の中学校教諭が中学生を対象とし，自己効力感について 10 年以上にわたり実験研究，調査研究を行ってきた成果をまとめたものである。学校現場では，生徒の自己効力感を高めるために励ましをおくり，「やればできるのだ」との思いを持たせ，「できない」という思いを取り去ろうと努力する。こういった活動は「暗示」を通して行われる社会的説得として捉えることができる。内田氏は数学の教諭という立場で心理学を専攻し，独創的な実験手法を用い，「他者から与えられる他者暗示」と「生徒自身による自己暗示」が自己効力感や学業成績に及ぼす影響について実証的な研究を行った。

他者暗示の研究では，プロジェクターと偏光グラスを用いた特殊な映像刺激法を用いた。この方法を用いると，複数の参加者に同じ刺激を見ていると認識させつつ，実は異なる刺激を見せることができる（縦の偏光グラスをかけた生徒は縦偏光で提示される情報を，横の偏光グラスをかけた生徒は横偏光で提示される情報を見ることになる)。この方法を用い，クラスの生徒全員に同じ課題を解いていると信じさせつつ，対象となる一部の生徒にだけ易しい課題を解かせ，好成績を取らせ，級友から社会的賞賛（他者暗示）を受けるよう操作を行った。そして，この方法より引き出される成功体験が自己効力感や，直後ならびに遅延後の学業成績に及ぼす影響につき調査した。

自己暗示の研究では，内田氏らが開発した「集団式潜在連想テスト」を用いた。この潜在連想テストでは，例えば「幸福」「不幸」などの単語に混ぜて「数学」「理科」という測定対象語を提示し，各単語につき「良いこと」（○）か「悪いこと」（×）を一定時間内にできるだけ速く判断させる。各測定対象語について「良いこと」と判断させる条件と「悪いこと」と判断させる条件で複数回の遂行をさせると，測定対象語の回答に要する反応時間の微細な違いが総遂行数の差として測定できる。つまり，遂行数の差分を調べることで，本人が「数学」や「理科」に対して潜在的にもっているイメージ，すなわち，本人も気づいていない教科の好き嫌いを測定することができる。この潜在的な意識を，通常の顕在的アンケートによる回答と比較し，乖離がある生徒を検出し，さらにその半数に対し，教育的介入を行った。

暗示の効果は，従来，目撃証言の信用性や社会的説得という文脈で検討されることが多く，教育，特に自己効力感との関わりで論じられることはなかった。内田氏は，新しい観点・方法論で自己効力感の解明に取り組んだといえる。

１）本論文の研究成果

本研究の意義は，学校現場において他者暗示，自己暗示の教育効果を明らかにしたことである。

他者暗示に関する主たる成果は，以下の 4 点である。(1) 一度の予期せぬ成功体験（アナグラム課題）とそれに伴う社会的賞賛という他者暗示により，成績中位の中学生の自己効力感が向上し，長期間にわたり維持されること，(2) 日常的に失敗経験が繰り返される課題（計算課題）での他者暗示は自己効力感に影響を与えるものの，その効果は小さいこと，(3) 自己効力感の向上による影響には性差があり，その効果は男子生徒で大きく，女子生徒では小さいこと，(4) 成績中位の中学生の学業成績偏差値は，中学 1 学年 1 学期に比べ低下していき，特に女子生徒で顕著である一般的傾向があること，である。

自己暗示に関する主たる成果は，以下の 4 点である。(1) 集団式潜在連想テストと自己報告型のアンケート調査との結果の食い違いを調べることで，自己暗示の程度を測定できることを示したこと，(2) 中学生の２割は「自分は数学が嫌いである」という否定的な自己暗示下にある「偽装数学嫌い」であり，それは「偽装理科嫌い」よりも多いこと，(3)「偽装数学嫌い」の生徒は，「真の数学嫌い」よりも学業成績は高いが，顕在意識が肯定的な「真の数学好き」や中間的な「偽装数学嫌い予備軍」よりは学業成績が低いこと，(4)「偽装数学嫌い」の生徒に，数学に対する潜在的態度の事実を伝える教育的介入を行うと，１年後には「偽装数学嫌い」の多くの生徒の学業成績が向上すること，である。

本研究は，教育現場でなければ行えない実践的でかつ実証的な研究である。その方法や成果は中学生の学力の理解やその向上に役立つだけでなく，認知発達や学習，動機づけに関する基礎研究においても重要である。

２）学位授与に関する委員会の所見

以上のことを総合的に評価し，本委員会は，本論文の著者内田昭利氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。